# 福島支部会報 36号

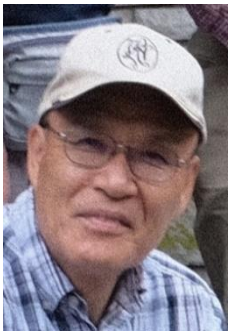
## 日本山岳会福島支部

（令和3年10月～12月の活動）

令和4年（2022年）1月15日発行


公益社団法人日本山岳会福島支部
支部長　佐藤一夫
事務局 〒960-8133 福島市桜木町13-43
渡部展雄　気付
電話(FAX)：024-533-0541
携帯：090-2880-9805


## 佐藤一夫支部長新年のあいさつ



新年あけましておめでとうございます。会員の皆様方には、清々しい新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年はコロナ禍により定例行事（フリークライミング講習会、登山道整備、山の日記念「親子登山」、納涼会・・・等）を２年連続で中止せざるを得ない不本意な１年になりました。

そんな中、福島支部に調査委託された４本（①沼田・会津街道②八十里越③六十里越④大峠・会津中街道）の「山岳古道調査」については、９月以降、会員各位のご協力を得て調査山行を開始することができました。

今年も引き続き調査山行を継続いたしますのでご協力をお願いいたします。

令和４年はコロナ禍が収束に向かい、諸行事の再開により、「クラブライフ」を楽しめる日々が訪れることを祈念し、新年のご挨拶といたします。

## 支部活動報告（2021年10月～12月）

### 山岳古道調査の取組結果

「既報３５号」で紹介したとおり、９月から本格的調査活動を開始した山岳古道は、１０月以降「六十里越」と「八十里越」という２つの難所に差し掛かった。

この２つの峠道は奥只見に位置し、近代化の波に追いやられようとしている古道だ。幸いなことに地元３名の会(友会)員の古道復活にかける意気込み大なるものがあり、今回の調査に熱い思いで参加していただいた。

調査拠点の只見町「民宿山響(やまびこ)の家」前で出発前に記念撮影。鈴木章一会員の奥様早苗さん（民宿経営者）の手料理とおもてなしが最高の宿。左から長谷部、渡部展、鈴木章一、鈴木早苗(奥様)、(前)小林正、(後)熊谷、菊池、三瓶恵、佐久間、大島省吾会員

「八十里天保古道」の復活に長年にわたり取組み、世界遺産を目指している前只見町森林組合長鈴木章一会員。さらに叶津口留番所４６代目当主の長谷部忠夫会員は、八十里越の歴史的な思いを背負いながら古道復活に日々活動している。さらに「六十里越」はじめ会越国境の山々を知り尽くす鈴木嘉津雄友会員の地元居住者３名を中心に二年越しの調査山行に入ることとなった。

山行計画を練り上げたのは長谷部忠夫会員。長谷部氏の計画に基づき、佐藤一夫支部長以下支部会員、古道調査契機として積極参加していただいた大島省吾会員、大峠調査から２度目の参加となった渡邉(尋元)友会員などその活動を紹介します。

### 「八十里越・明治新道、天保古道」調査

「八十里越」は福島・新潟県境を跨ぐ峠道。風雲急を告げる幕末の世、北越長岡藩が明治新政府軍との戦いに敗れ、藩主牧野忠雅以下家臣、町民１万５千人が会津藩に落ち延びるのにここを越えた。その際、長岡藩家老河井継之助が辞世の句として詠んだ「八十里　腰抜け武士の　越す峠」が有名である。

八里の道(峠)が八十里にも思えるほど長く険しいことから「八十里越」と呼ばれ、その歴史は遠く平安時代にまでさかのぼる。新潟県側三条市吉ケ平から福島県只見町叶津まで、人々の往来のため険しい山岳地域に開削された。歴史的にも近世まで重要な峠道と位置付けられながら、豪雪地帯のため崩落と開削が繰り返された。そのため「古道」、「中道」、「新道」と３つのルートが開かれてきた。通行人や荷駄を取り締った只見・叶津側に設けられた口留番所の建物は現在只見町により保存管理され、膨大なその古文書や資料は長谷部家（長谷部忠夫会員）が県立図書館に寄贈して厳重に保管されている。

鈴木章一会員作成の「八十里越」の調査図。原寸は新聞紙見開きにして３枚分あり、地理院地図を拡大、只見・叶津から新潟県境「木の根峠」までのルート、緯度・経度座標を克明記して画像も添付。上記地図は「天保古道」の抜粋で、画像上部に「明治新道」も明記。

八十里越の現状はどうか。４年前の初秋、福島支部山行として１泊２日で「明治新道」を越えた。その時「天保古道には踏み跡もなく入れない」ことを印象付けられた。

だが現在、調査に着手して明らかなことは、

「一番荒廃が進んでいる古道(通称天保古道)に多くの遺構や遺跡が残っている。ここを後世に残したい。」

との鈴木章一、長谷部忠夫両会員の熱い思いである。

## 10 月 16 日「八十里越・明治新道、一部古道」調査

只見町農家民宿「山響の家」に前泊、当日朝合流の会員を含め９名が 07：00「明治新道」調査に出発。

この日は福島民報社記者の取材を受け、その記事が 10 月 23 日付朝刊に掲載された。～抜粋して添付

大麻平登山口から約４時間、新潟県境の「木の根峠」まで行き、ここからヘアピン返しに「天保古道」の藪漕ぎルートに入り只見向け調査を行った後、明治新道を引き返した。

只見―新潟

古道「八十里越」調査

日本山岳会福島、２日かけ

日本山岳会福島支部は十六、十七の両日、只見町と新潟県三条市を結ぶ山岳古道「八十里越」を調査した。

日本山岳会は二〇二五（令和七）年の創立百二十周年記念事業として、全国の山岳古道の調査を行っている。八十里越の調査も同事業の一環。調査結果は二〇二五年にホームページや書籍での発表を予定している。

福島支部の今回の調

新道入山口の大麻平

県境「木の根峠　茶屋跡

倒木や　地すべり箇所、沢越えに悩まされる

自然崩壊はあるが危険な個所は少ない

16：00 大麻平登山口に下山。この日の調査終了。民宿「山響の家」に戻り夕食、長谷部会員から地元酒差し入れもあり八十里、六十里の歴史談議で大いに盛り上がった。

写真は左手前から熊谷鶴三 紅一点三瓶恵子 菊池道彦 佐久間隆夫
右手前から小林正彦 佐藤支部長 長谷部忠夫 大島省吾の各会員

## 10 月 17 日「八十里越・天保古道」調査

昨夜来の雨でコンデションが悪い中、07：30 民宿「山響の家」出発。「八十里・天保古道」は国道 289 号線浅草岳登山口から入山する。登山道をしばらく行くと浅草岳と古道の分岐「山神の杉」となり、天保古道はここを右手に下る。原生林のなか快適に歩を進め、「ブナ平」「ブナ太郎(枯死)」「ブナ次郎」の大木を通り過ぎ「小三本沢」で足止めとなる。作夜来の雨で濁流となって渡渉不可のため、これより先藪漕ぎ約８時間の調査は令和４年度以降に持ち越した。

① 調査メンバーの小林、長谷部、三瓶、熊谷、大島、佐久間の各会員

② 小三本沢の増水で足止めとなり渡渉不可となる。

③ 小三本沢の瓦礫を越えて渡り切った藪の中央部分が天保古道ルート

④ 浅草岳登山口で記念撮影。2 泊三日の八十里越は令和4年度以降に持ち込みとなる。

## 「六 十 里 越 古 道」調 査

「六十里越」は新潟県大白川(小出町)と福島県只見をつなぐ峠道である。その一部は 70 年の間ダム水底に沈んだままとなっている。昭和 22 年５月、尾瀬を水源とする只見川沿いで平和裏に生活を営んでいた流域住民は、寝耳に水の福島民報記事「只見川に大発電所建設」で混乱した。

国は太平洋戦争で荒廃した国土(首都圏)復興のため国策として流域に 20 箇所の水力発電所建設して電力を確保するとぶち上げた。こと田子倉ダムは、貯水量我が国 3 番目の大がかりなもので、戸数 50 戸、住民 300 人を巻き込み、膨大な補償金と土地収用法を適用して昭和 29 年完成した。

ここに田子倉集落の住民が昭和 6 年に遺した日記を紹介する。(渡部政吉著 「-田子倉 渡部家の来歴-」から抜粋)

**「世界的不況、金解禁政策、緊縮財政など重なった昭和 6 年の不景気は、農村において殊のほか厳しいものがあった。田子倉では大正 11 年に六十里峠林道開発のため多額の負債を抱えていたが、その年の春兄貞次郎は、私財を以ってその年の年賦償還金を返済した。、、、」 筆者大橋シツエ**

当時六十里峠がいかに大切にされていたかわかる。その峠は昭和 49 年９月、国道 525 号線として全線開通した。県境には、当時の総理大臣田中角栄揮毫による「記念碑」が建ち錦秋の時期は多くの観光客マイカーが行き交っている。

**下は鈴木章一会員所蔵の写真。田子倉集落手前には「六十里峠洞門」があった。5 歳のころの奥様が映っている。**

水没前の田子倉集落　ダムは画像左に建設された

## 10.30「六十里越」～藪漕ぎの中全コース踏査

JR 只見駅 07：00 集合

地元只見町の長谷部忠夫会員と鈴木嘉津雄友会員の待つ只見駅前広場に早朝自宅出発組の渡部展雄、友会員渡邉尋元(福島)と大島省吾（須賀川市）会員が合流、打ち合わせの後、国道 252 号線白沢トンネル駐車場から入山。

「六十里越」の最高標高は 883mで、白石トンネルを起点に国道 252 号線と並行して新潟県側に進む。白沢トンネルから田子倉ダム向かっては廃道のため調査対象外。

入山してすぐは整備された峠道であるが、送電線鉄塔が見えるころから藪漕ぎとなり、転倒など悪戦苦闘を繰り返し（地元の長谷部、鈴木は何事もなかったように）新潟県側の田子倉トンネル出口まで 踏査、16：00 終了した。

今回の調査は踏査と記録中心で、来春以降只見町による山道の刈払いを要請し、整備完了後に再調査の予定。

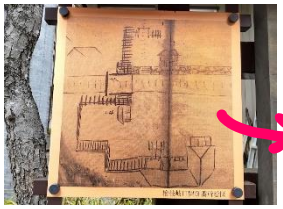
六十里越入口の白沢トンネル

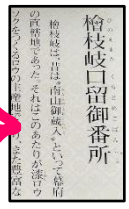
下山口の新潟側六十里トンネル

## 10.31 旧沼田街道(七入峠)史跡の現地調査

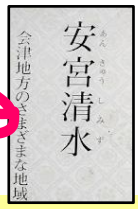
六十里越調査を終えた 10 月 30 日、渡部展、渡邉尋の 2 名は「民宿山響の家」に宿泊、鈴木章一会員ご夫妻から田子倉ダム建設について貴重な口伝を得た。

その詳細(忍従の歴史)は別の機会に報告することとして、翌 10 月 31 日 2 名は桧枝岐村に移動、「沼田街道」史跡、遺構の現地調査を実施。手始めに桧枝岐観光課長とレクチャー、遺構等場所を地図にて確認、その後場所を探索しながら数十枚の写真撮影を行い 15：00 終了、帰宅。





現在の桧枝岐郵便局



写真上は桧枝岐郵便局敷地にあった「口留番所」と設置看板
写真下高倉宮伝説の「安宮清水」。右 沼山峠入口・七入の「山の神」

## 支 部 員 個 人 山 行

コロナ禍の中、佐久間隆夫会員の個人山行が 2 件ありましたので紹介します。～メンバーは佐久間ほか山仲間 2 名

## 10.7(木)～9(土)立山縦走登山

10 月 7 日 7:30 扇沢から入山。8:50 室堂～雷鳥沢でテン泊準備後 10:00 大日岳往復。剣岳・早月尾根カニノハサミの雄大な景色を堪能。15:00 テント場着（泊）

10 月 8 日快晴 06：30 テント場～一の腰～浄土山～雄山～大汝山～富士ノ折立～真砂岳～別山 16:00 剣御前小屋迫。

10 月日　小屋 7:30 発。12:00 室堂着その後帰路へ

写真は一の越からの剣岳、チングルマの綿毛と紅葉

## 10.21(木)～23(土)新雪の奥穂高岳登山

10/21(木)6:30 上高地発。涸沢着、30cm の積雪。

翌 22 日(金)快晴、モルゲンロートが美しい。ザイテングラート直登。新雪に手こずり計画変更、奥穂往復し下山(泊)

10/23(土)　新雪が多く積雪 50c に。絶景ポイントの涸沢ヒュッテに2泊、新雪の穂高涸沢に感激。

写真は右から奥穂高のモルゲンローテと雪をかぶったナナカマド

## 支部山行　錦秋の霊山登山

11 月 13 日（土）支部主催「霊山縦走」実施。佐藤支部長以下 11 名参加。下山後青柳山荘でコーヒータイム。2 名の一般参加者が、「友会」入会意志を固めてくれた。

8:00 湧き水の里から9名が入山、12:00 子供の村駐車場に下山。

青柳山荘でコーヒータイム。一般参加の 2 名(女性)は緊張の中、会友への入会を表明

## 事務局からのお知らせ

### 今後の支部行事について

① **2 月の「支部新年会」**はコロナ禍により中止します。
② 3 月実施予定の**「万世大路・二つ㋡小屋トンネル氷柱探索」と「母成峠・杉田林 スノーツアー」**は、コロナ感染情勢を勘案のうえ 決定します。

### 新入会員の紹介

**○ JAC 会員　鈴木弘晃氏（61 歳）**

11 月 15 日付で入会が承認されました。鈴木氏は元福島県警 警察官で、現在県察本部関連団体に勤務中。

**○ 支部友会員　渡邉尋元(ひろもと)氏（66 歳）**

10 月 1 日付で入会、元福島県警 警察官で、支部主催磐梯山親子登山などに積極参加されていました。

以上 2 名の新入会員のご活躍を期待します。

# 山岳古道との出会い

会員番号15114 菊池道彦

～「山岳古道 120 選」の調査活動積極参加者から寄せられた寄稿～

一歩足を踏み入れたその道。広々と幅 5 メートル！…事前の予測が覆った。落ち葉のクッションが靴底に心地よい。これが八十里越⁉…数年前、新潟側から二日がかりの踏破に挑戦したわが仲間たちを憔悴させた道だ。その落差の大きさに好奇心を駆り立てられ、案内役で八十里越只見側番所の当主、古道研究家の長谷部さんに質問を重ねながら歩いた。

八十里越は三本ある。まず稜線を通る天保の道、河井継之助が戸板で運ばれた道だ。次が明治 15 年に通されたもの。そして 27 年開削、今回、足を踏み入れた私を驚かせた道だ。

地図に記入された「一等水準点」の文字がかねてから気になっていた。まるで“国道”ではないか？

明治 27 年は日清戦争開戦の年、ロシアとの対峙を想定した軍事用道路として国家的な要請から完成したことが推定される。あの八甲田死の行軍の時代とほぼ重なる。

ふがいなくも体力の限界を感じ私は踏破目標の半分もいかぬ地点から引き返した。ふかふか道の先では、かつてあった橋や桟道が崩落したままの場所が続いて体力を奪われたのだ。

案内役の長谷部さんたち地元ではそうした崩落個所修復に国や自治体の予算を求め、五年後までには一定地点まで一般の観光客も古道散策を楽しめるようにする計画だという。訪れた人々がこの古道の現役時に想像力を膨らませ、先人たちの旅に思いを馳せつつ散策を楽しむ～そんなことがもうすぐ実現するのだ。

引き返す道、同道してくれた渡部展雄さんに、ほんの入り口までだったが八十里越を歩めた充実感と心地よい疲労感を語った。古道をもっと知りたいという気持ちがむらむらと湧き上がるのを感じていた。

古道企画では八十里越に先立ち尾瀬の古道と旧三斗小屋温泉を通る大峠の道の調査もあり道が秘めた歴史に心を誘われた。大峠の道ではこれまで案内板で名を知るだけだった「観音沼」が古道の途中の名所だったことも知った。江戸時代建立の観音堂が畔にあり、地元下郷町の手で公園として整備され大きな駐車場も設置されている。古道歩きを楽しむ人々のいい休憩地になることが予想される。

古道企画は副産物を生んでくれた。尾瀬と八十里では桧枝岐一泊、只見二泊で支部メンバーの参加を募った。それぞれに十人を超える参加があり夕食時は久しぶりの集いの場となった。八十里越の稿をまとめてくれる長谷部さんも参加、顔なじみの仲間のほか、古道企画に興味を持った須賀川市在住の支部会員大島省吾さんの初参加があった。支部は新しい仲間を得た。大島さんは昨年最後の六十里越調査では、かけがえのない支えとなってくれている。

仲間との集いの場は、コロナ禍の間隙をぬって実現したもの。今年以降の感染拡大の状況によっては再現が難しいかもしれない。しかし、今回の山岳古道刊行の 2025 年まではまだ時間がある。ぜひ支部の仲間がそれぞれに参加感を持ち続けて機会に恵まれれば集いの場を持ちたいと思う。

八十里越では、只見町在住ベテラン支部メンバー鈴木章一さんが多くの資料を提供してくれた。その鈴木さんから「あとは事務局がどううまくまとめるかだね」と渡部展雄さんへの“プレッシャー“もかかっているとか。みんなの力を寄せ合って支部の団結力を結果に実らせたいものだ。

今年は二次選択候補に挙がっている「米沢街道」や須賀川市長沼から郡山市湖南三代までの「勢至堂峠(太閤の道)」などが決定をみれば、そちらの方の作業も新たに開始になる。地元でさえあまり知られず歴史の陰に埋もれてきた古道に支部の仲間の支えで光を当てて世に知らしめたいと望みつつ筆を置く。

10.16「八十里越・新道」始点の大麻平で記念撮影。左から小林正彦 長谷部 佐藤一 三瓶 大島 佐久間 菊池(筆者) 熊谷鶴の各会員

JAC 本部の恒例行事「年次晩さん会」がコロナ禍で 2 年連続中止となり、それに代わるリモート会議発表の要旨です。

# リモートトークへの出演報告　支部長　佐藤一夫

昨年(令和 3 年)12月4日(土)の19時から、晩餐会中止に代わる、「リモートトーク」へ出演しましたので、その時のトーク内容をご報告いたします。トーク内容は「支部からのたより」というテーマで、4支部(北海道支部、福島支部、四国支部、東九州支部)が選ばれ、支部の紹介です。

福島支部は、1、支部の概要、2、初の海外登山と東日本大震災・原発事故、3、震災・原発事故発生後10年の歩みについて話しました。

1、福島支部の概要

① 福島支部は新潟県支部(現越後支部)の助言を受け、全国で5番目の1947年12月7日に設立されました。

初代支部長は伊藤弥十郎氏。会員数 24 名、伊藤氏は大島亮吉氏と知己の間柄あり、大島氏は昭和3年3月に前穂北尾根で墜落死してしまいますが、右の写真はその一カ月前八ヶ岳の硫黄岳山頂で伊藤弥十郎氏が撮影したものです。大島氏最後の遺影となりました。

② 上高地山研の鐘は、福島支部創立35周年記念で作製し寄贈したものです。鐘の制作者は、蒸気機関車の設計製作をしていた会員(野地氏)が、機関車ベルの金型を借りて制作したものです。鐘の寄贈先は、上高地山研、安達太良山のくろがね小屋、吾妻小舎、吾妻慶応山荘、飯豊山の山頂、磐梯山の弘法清水、那須の坊主沼、尾瀬長蔵小屋の8ヶ所です。他に希望する会員向けに50余りを作りました。この鐘が現在の日本山岳会会員証に使われています。

2、初の海外登山と東日本大震災・原発事故

① 震災の1年前に、2年後の支部創立65周年記念事業として福島支部初の海外登山を計画しましたが、隊員募集を開始した矢先の2011年3月11日に、東日本大震災と原発事故が発生しました。この時期に海外登山を実施して良いものかどうか？　悩みましたが、会員の後押しと、復興に立ち向う「ふくしまからはじめよう！」という県の応援メッセージに励まされ、登山計画を進めました。各メディアからは、復興のシンボルとして注目され、下山後、現地のイスラマバードで共同通信社から取材を受け、帰国後は、成田で新聞社の取材を受けました。更にその後、NHK 福島のニュース番組に出演しました。

② 登山時期は、2012年(平成24年)7月8日～8月3日まで。登山隊名は、2012年、日本・パキスタン国交樹立60周年記念・日本山岳会福島支部創立65周年記念・日本・パキスタン合同カラコルム登山隊です。2012年が日本とパキスタンとの国交樹立60周年でもあることから、駐日パキスタン大使の後押しにより合同登山が実現しました。

本登山の現地エージェントは、パキスタンの登山家ナジール・サビール氏が経営するナジール事務所です。パキスタン隊員はナジール事務所のメンバーで、ナジール氏の息子青木雄幸(本名・タヒールナジール、当時18歳、母親は日本人)も参加されました。日本隊員15名、パキスタン隊員4名、現地ポーター多数です。6105mの無名峰に初登頂し、ウメード・サール(希望の峰)と命名しました。

登頂者は、日本隊員3名、パキスタン隊員4名です。行程は、成田～イスラマバードへ飛び、登山基地のシムシャールからキャラバンを開始、4日目にシュイジェラーブのBCに到着。その後C1、C2を設置し、登頂成功。登山基地のシムシャールを出発し、登山基地に戻るまでの期間は12日間でした。日本隊員15名の内8名は、本登山参加を機にJACに入会し福島支部で活躍しています。

C1(4983m)から C2(5324m)へ
1.　約4時間の荷揚

ウメード・サール(希望の峰)山頂6105mで登頂記念撮影
C2 から山頂までは往復 10 時間

3、震災・原発事故発生後10年の歩み

2011年(平成23年)3月11日の東日本大震災と原発事故発生時には、各種会合や諸行事を中止しましたが、6月以降は地元の登山を再開しました。原発事故のあった阿武隈山系を除いては、特に山の放射線量を気にすることなく登山を継続しました。

震災の翌年4月上旬から、山岳地帯の放射線量測定を開始しました。その年には前述の支部創立65周年記念の海外登山を実施し、その後、2019年までは恒例の登山道整備、植生復元作業の他、三百名山調査登山、公益事業としてのフリークライミング講習会、山の日制定記念の「親子登山」等を実施しました。

2020年(令和2年)には、コロナ禍で恒例の諸行事等を全て中止しました。

コロナ禍が続く2021年(令和3年)には、諸行事を中止したものの、山岳古道調査山行を開始することができました。

以　上

# ＪＡＣ福島支部アーカイブス

「墜ちるなら富山県側へ」。山男たちにひそかに語られてきた言葉。27年前の平成6年9月下旬、谷口隊長率いる富山県警山岳警備隊の活動拠点立山で開催の「山岳遭難救助訓練」に参加した体験記「その一」です。 事務局 渡部展雄 記

## 四十七歳の抜けがけ（ 挑戦）

たいへん気恥しい話であるが、平成6年9月下旬、福島県警察を代表して「全国 山岳遭難救助指導者研修会」に参加する機会を与えていただいた。 この研修は、平成3年を初年度として、警察庁地域課が毎年富山県警と長野県警の協力を得て開催している。研修に参加できるのは都道府県から各1人のみ。その目的と狙いは、山岳遭難救助活動の中心となって働ける現役隊員を養成することにある。最近、社会問題になりつつある中高年登山者の遭難事故を視野に入れてのことだ。 警察庁としては、技術の習得や向上はもちろんのこと、富山、長野、群馬県などこれら活動の先進県に倣い、未だ低レベルにある県の意識変革を目論んでいる。したがって年齢的な制限など参加資格は当然厳しい。研修後はその成果を持ち帰り、各県のリーダーとして活躍するという義務も負わせている。できるだけ多くの研修生を送り出すため、再参加も原則として認めない。（実際は第1回から連続参加し、常連となっている者もいる）

この厳しい条件を無視し、47歳を過ぎた中高年警察官が志願することになった。理由はただ山が好きということだけ。

現役で頑張るのには年を取り過ぎていた。研修を受けたとしても指導者としてやっていけるだけの自信はない。でも行きたかった。若いころからの夢とでも言おうか、山に寄せてきた想い捨て難いものがあり、この研修があると知ったとき、恥も外聞もなく上司にお願いした。それは明らかに前途有望な若い人たちに対する抜けがけでしかなかった。

見るに見かねて？か、署長はじめ本部地域課長など上司の方々の粋な取り計らいのお陰で参加することができたのであるが、私自身、研修に参加できて実に満足している。富山県警山岳警備隊員との素晴らしい出会い、各県から参加した精鋭との交流など、短期間の中で多くの得難い体験をすることができた。

この研修は来年以降も続けられるという。今後、福島県警察の若い精強な警察官の中から本研修会への希望者が多く出て、真に山岳遭難救助活動の中心となって活躍してくれるという願いを込め、これから皆さんに研修の結果を紹介したいと思う。それが「抜けがけ」をした中高年警察官のせめてもの償いと考えてのことだ。

人を魅了する山あるゆえに悲劇が生まれる。その苦しみを救おうとする男たちの生きざまを見てほしいと思う。文章の推拙はお許しいただき、ガマンして読んでいただければこれ以上の幸せはない。

### 文部省登山研修所

「平成6年度全国山岳遭難救助指導者研修会」は9月26日から10月3日までの8日間、富山県立山町にある「文部省登山研修所」をベースに行われた この施設は読んで字のごと・く、文部省、つまり国立の宿泊・研修施設で、山岳関係者の間ではブントケン（文登研）の略称で親しまれている。

我が国近代登山の先駆者槙有恒氏の提唱で建設された全国唯一の施設として、過去幾多の登山家を輩出してきたことで知られている。山登りにかけては他に類を見ないほどの優秀なスタッフと最新の装備を有し、年間を通じ全国の地域、職場、学園等からやってくる人たちは跡を絶たないという。なかでもここ文登研と富山県警山岳警備隊とは切っても切れない縁で結ばれていることがわかった。両者は登山がスポーツとして普及しはじめる昭和30年後半から40年代にかけ産声を上げて以後、今でも固いきずなで結ばれていた。

立山連山に源を発する称名川を見下ろす高台に文登研はあった。裏庭に建設された約20mの人工岩場が入所生の気持をいやがうえにも高ぶらせる。沖縄など山岳地域を有しない7県を除き、40都道府県から40人の精鋭たちが、大型ザックに入り切れないほどの登山装備を詰め文登研に集合した。いずれもベテランのような顔をしているが登山経験のない者、人不足からか毎年この研修に参加している者、大学山岳部で活躍してきた者、レンジャー隊員など様々で、半数は機動隊員であった。年齢も21歳から47歳(私)までと大変な差が見え隠れしていたのである。一方、講師の先生方といえば、富山、長野県警における現役山岳警備隊員の方々で、以後、文登研で寝食を共にしながら命がけの猛訓練に明け暮れることになる。

### 訓練を支えてくれた人たち

明日から厳しい訓練が始まるという夜、緊張の中、言われるまま文登研の食堂で夕めしを平らげたが、ご飯のおいしいことに驚かされた。9月25日といえば新米が市場に出るか出ないかというころである。おかずも家庭料理の雰囲気がある豪華なもので、「さすが文部省は違う」と思った。ところが、翌日ひととおりの開講式が終り、研修のトップバッターとして講話された富山県警山岳警備隊谷口隊長が、「文登研は貧しいので食事を作る職員がいない。3食とも業者が朝運んで来て、それを皆さんに食ってもらっていた。今回どうしたものかと考えた末、皆さんに冷たいメシを食べさせるわけにもいかず、隊員の奥様方にお願いし、ボランテイアで食事を作ってもらうことにした。富山のコシヒカリの新米を腹一杯食って頑張ってくれ」 と受入れ側の苦労のほどを打ち明けたのである。以後研修生は、立山室堂にある「自然保護センター」に移動宿泊した3日間を除き、二人の奥様にお世話をかけることになった。

午前6時30分の朝食にはじまり、昼の弁当と夕食まで常に真心のこもった料理でもてなしていただいた。朝早くから夜遅くまで文登研の厨房に立ち、我々の活動を支えてくれた人こそ、ほかならぬ谷口隊長の奥様であり、もう一人の方が清水分隊長の奥様であると知ったのは研修も最終段階に入ったころであった。谷口隊長本人も御夫婦で厨房に立たれ、研修生の弁当作りに精を出していたという。こうした温かい心を研修生が感じ取らないはずはなく、一度たりとも一言も食事に関する不満や訓練に対する弱音を聞くことはなかった。このことでは今でも頭が下がる。命を賭け、山岳遭難救助活動に取り組む谷口隊長以下全隊員の心意気をいやがおうでも感じざるを得ないものとなった。訓練が日増しに充実していくことになったのはいうまでもない。内助の功と隊長以下の気迫が、遊び心で参加した研修生の気持ちを変えていく結果となったのである。

それからもう一人、忘れてならない女(ひと)がいるので紹介したい。名前は絹子さんと言い、富山県警山岳警備隊員から恐れられている人だ。～以下次号